

# 母親の子育て成功感を規定する要因

——階層格差はあるのだろうか——

邵 勤風 (Benesse 教育研究開発センター教育調査課長)

## ◆ 要約

- ◎母親の子育てのあり方や、子どもの学力、子どもからみた親子の会話の量は文化階層によって異なる。
- ◎文化階層が高いほど、母親の子育て成功感が高い。
- ◎母親の過去の子育て行為やしつけや子どもの教育方針、今の子育て行為、また親子の会話の量の頻度が母親の子育て成功感に及ぼす影響をクロス集計により検討したところ、階層によらず、ほぼ同様な傾向がみられた。
- ◎母親の子育て成功感を規定する要因についてロジスティック回帰分析を行った結果からは、階層による差がみられた。特に上位層と中位層では子どもの学力が規定要因になっているのに対し、下位層では子どもの学力が規定要因から外れている。ただし、本の読み聞かせは規定要因になっている。階層格差の固定化の可能性があること、母親は子どもの学業での成功からおりることで自己の子育てを高めるようにしている可能性がある。

## 1 問題設定

近年、子育てや家庭教育に関する調査研究では、次のことを明らかにしてきた。家庭の教育力やしつけは衰退しているのではなく、むしろ高くなり、全方位型の母親が増えていること (広田 1999)。子育てのあり方について、「のびのび」した子育て、「きっちり」した子育てがある。親の学歴や家庭の経済階層が高いほど、「のびのび」した子育てにも、「きっちり」した子育てにも力を入れる。そして社会階層が高い母親ほど「きっちり」した子育てに力を入れる傾向が顕著であり、またその後の子どもの学業達成に影響を及ぼしている。子育てのあり方を規定する要因は母親の社会階層である (本田 2008)。母親が子

どもの教育に対して抱く関心が高まり、子どもへの関与が強まっている。一方では、子育てを通して自分も成長したと実感する機会が減っている (Benesse教育研究開発センター 2007)。さらにこの調査からは、大卒の母親も非大卒の母親も、同様な傾向がみられた。

これらの研究が示すように、社会階層によって、子育てのあり方が違ってくるが、子育てをしてよかったといった気持ちの面、子育ての充実感、成功感は、社会階層による違いはあるのだろうか。もし子育て成功感も社会階層による違いがあるのなら、それぞれの階層において子育て成功感を規定する要因とは何だろうか。

子育てには正解はない。また客観的というより、母親自身が子育てをどうとらえている

のか、どう受け止めているのか、また子育ての充実感や成功感を得られるかどうかことが重要であると考えている。母親たちは何をもちて子育てに成功していると感じているのか、本研究を通して、少しでも明らかにできたらと願っている。

本稿では、①社会階層によって、子育てのあり方に違いがあるのかを本調査を通して検証する。②社会階層によって、子育て成功感到違いがあるのかを明らかにする。③社会階層による子育て成功感の規定要因が異なるのかを明らかにする。

## 2 仮説

上述した明らかにしたいことから、次の仮説を立てる。

**仮説1**：母親の子育てのあり方については、文化階層の上位層ほど、「本の読み聞かせをする」「勉強以外に様々な体験をさせた」比率が高く、また親子の会話の量が多く、子どもの学力が高い傾向である一方、どの階層でもよく行う子育て行為や子どもの食事の世話などでは、文化階層による差はない。

**仮説2**：文化階層が高いほど、母親の子育て成功感が高い。

**仮説3**：文化階層によらず、過去や現在の子育て行為や子どもからみた親子の会話の量などの頻度が母親の子育て成功感に影響を与える。

**仮説4**：文化階層によって、子育て成功感の規定する要因は異なる。上位層では、よく行う子育て行為も子どもの学業も規定要因になるが、文化階層の低い母親はよく行う子育て行為だけが規定要因になる。

## 3 使用する変数

父親と母親では子育てに対する意識や行為などが異なる可能性があるため、本稿では保護者票については母親票のみ分析する。

### 従属変数

HQ21B「子育てにある程度成功している」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「子育てに成功している群」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「子育てに成功していない群」と、2群の変数を設定。さらに「高群」=1、「低群」=0としたダミー変数を設定。

### 使用する主な独立変数

1. HQ13A「本の読み聞かせをする」、HQ13D「美術館や博物館に行く」について、「ひんぱんにした」「ときどきした」を「高群」、「あまりしなかった」「ほとんどしなかった」を「低群」と、2群の変数を設定。さらに、「高群」=1、「低群」=0としたダミー変数を設定。
2. HQ15C「勉強以外に様々な体験をさせた」、HQ15D「子どもを尊重・応援した」については「1.」と同様な手続きを採用。
3. HQ16B「子どもに小言を言う」、HQ16E「子どもとスポーツを楽しむ」については「1.」と同様な手続きを採用。

HQ16C「子どもをほめる」は「よくある」を「高群」、「ときどきある」を「中群」、「あまりない」「まったくない」を「低群」と、3群の変数を設定。さらに、「高群」=1、「低群」=0とした高群ダミー変数、「高群」=0、「低群」=1とした低群ダミー変数を設定。

4. Q44A～G（親子の会話の量）のすべての項目について、「よく話す」から「ほとんど話さない」までの4段階を4点から1点まで得点化し、総得点を算出したうえ、16点まで（全体の55.4%）を「高群」、17点以上（全体の44.6%）を「低群」と、2群の変数を設定。さらに、「高群」=1、「低群」=0としたダミー変数を設定。

5. HQ11A～E（子育ての悩み）のすべての項目について、「とても気になる」から「まったく気にならない」までの4段階を4点から1点まで得点化し、総得点を算出したうえ、11点まで（全体の60.0%）を「高群」、12点以上（全体の40.0%）を「低群」と、2群の変数を設定。さらに、「高群」＝1、「低群」＝0としたダミー変数を設定。
6. HQ18（子育ての分担）について、「ほとんど母親が行っている」と「それ以外」の2群の変数を設定。「子育てはほとんど母親が行っている」＝1、「それ以外」＝0としたダミー変数を設定。
7. 子どもの学力：生徒票Q09への回答数を簡易学力スコアとして用いる。

## 4 分析

### 4.1 仮説1の検証

紙面の関係で、仮説1については、図表を割愛させていただく。

過去の子育て行為として、中学校に入学する前までの母親の子どもへの接し方をみると、「本の読み聞かせをする」「美術館や博物館に行く」では、文化階層による差があった。上位層ほど行為を行う比率が高く、下位層との間に、20ポイントの差を開いている。また過去の子どもの教育方針について、「勉強以外に様々な体験をさせた」「子どもを尊重・応援した」でも、同様に上位層ほど行為を行う比率が高い傾向がみられた。しかし、食事、早寝早起き、あいさつといったしつけ面においては、有意差が認められなかった。現在の子どもへの接し方は、特に「子どもをほめる」では、階層による有意差が確認できた。それ以外の「子どもに小言を言う」「子どもとスポーツを楽しむ」は、どの階層の母親も回答比率が高く、階層による有意差がみられなかった。また、現在の子どもの学力は文化階層が上位層ほど、学力の上位を占める割合が高くなる。さらに現在の親子関係については、生徒が回答した親子の会話の量では上位層の

ほうが多く、下位層との間で、7.5ポイント差がある。一方、下位層で子育てに関する悩みや子育ては「ほとんど母親が行っている」のは、上位層に比べて、有意的に高いことがわかる。下位層の子育て環境はあまり恵まれていないことがわかる。

しつけや子どもと一緒にスポーツなどを楽しむことについては、どの階層でもよく行う行為であるため、階層による差がなかった。しかし、本の読み聞かせや子どもに勉強以外のことを体験させたこと、子どもがやりたいことを応援したことにおいては、文化階層による差が認められた。よって、仮説1は成立すると考える。

### 4.2 仮説2の検証

4.1において、子育てのあり方は文化階層による差が確認できた。子どもへの接し方や教育方針といった子育てのあり方や、子どもからみた親子関係のあり方は事実的な側面が強く、客観的なものと言ってもよい。それでは、子育ての充実感、満足度といった母親自身の気持ちを表す極めて主観的なものでは、文化階層による差がみられるのだろうか。本調査では、子育ての充実感や満足度については直接尋ねていないが、それらの意味に近い項目、「子育てにある程度成功している」を聞いているので、それを子育て成功感と言い換え、分析する。

表1に示した通りに、上位層と中位層では、「子育てに成功している群」の比率が約7割で、下位層は6割である。1%水準で有意差が確認された。したがって、上位層と中位層は下位層より母親の子育て成功感が高い。仮説2は部分的に支持されたといえる。

### 4.3 仮説3の検証

母親の子育て成功感をもたらしているのは母親自身の子育てに関する意識や行為、子どもの成長度合い、また子育て環境など、様々なと考えられる。ここでは、仮説1を検証する際に使用した、母親の過去の子育て行為、

表1 子育て成功感×文化階層

HQ21B×Q31				
文化階層	子育てに成功している群	子育てに成功していない群	合計	N
上位 (%)	68.2	31.8	100.0	(773)
中位 (%)	70.2	29.8	100.0	(842)
下位 (%)	61.0	39.0	100.0	(515)
合計 (%)	67.2	32.8	100.0	(2130)

1%水準で有意 p=0.002

表2 子育て成功感×中学校入学前の子どもへの接し方×文化階層

HQ21B×HQ13×Q31						
文化階層	中学校入学前の子どもへの接し方		子育てに成功している群	子育てに成功していない群	合計	N
上位	本の読み聞かせをする	高群 (%)	71.1	28.9	100.0	(505)
		低群 (%)	63.3	36.7	100.0	(259)
		合計 (%)	68.5	31.5	100.0	(764)
5%水準で有意 p=0.032						
	美術館や博物館に行く	高群 (%)	73.0	27.0	100.0	(408)
		低群 (%)	62.8	37.2	100.0	(358)
		合計 (%)	68.3	31.7	100.0	(766)
1%水準で有意 p=0.003						
中位	本の読み聞かせをする	高群 (%)	73.4	26.6	100.0	(488)
		低群 (%)	65.3	34.7	100.0	(346)
		合計 (%)	70.0	30.0	100.0	(834)
5%水準で有意 p=0.014						
	美術館や博物館に行く	高群 (%)	74.4	25.6	100.0	(386)
		低群 (%)	66.4	33.6	100.0	(444)
		合計 (%)	70.1	29.9	100.0	(830)
5%水準で有意 p=0.015						
下位	本の読み聞かせをする	高群 (%)	71.3	28.7	100.0	(216)
		低群 (%)	53.7	46.3	100.0	(294)
		合計 (%)	61.2	38.8	100.0	(510)
0.1%水準で有意 p=0.000						
	美術館や博物館に行く	高群 (%)	62.6	37.4	100.0	(171)
		低群 (%)	60.6	39.4	100.0	(340)
		合計 (%)	61.3	38.7	100.0	(511)
有意差なし p=0.701						

過去のしつけや子どもの教育方針、現在の子育て行為、親子の会話の量を取り上げ、子育て成功感と文化階層との3層クロス分析を行う。

表2は中学校入学前の子どもへの接し方と子育て成功感と文化階層との関連を示してい

る。家庭の文化資本の指標としてよく使われている「本の読み聞かせをする」の結果をみると、以下の2つのことがわかる。1つめは、どの文化階層においても読み聞かせ「高群」が「低群」に比べ、「子育てに成功している群」の比率が高いこと。2つめは、文化階層

表3 子育て成功感×中学校入学前の教育やしつけ方針×文化階層

HQ21B×HQ15×Q31

文化階層	中学校入学前の教育やしつけ方針		子育てに成功している群	子育てに成功していない群	合計	N
上位	勉強以外に様々な体験をさせた	高群 (%)	71.0	29.0	100.0	(583)
		低群 (%)	59.5	40.5	100.0	(185)
		合計 (%)	68.2	31.8	100.0	(768)
	1%水準で有意 p=0.004					
	きちんとしつけをした	高群 (%)	73.6	26.4	100.0	(348)
		低群 (%)	63.8	36.2	100.0	(417)
合計 (%)		68.2	31.8	100.0	(765)	
1%水準で有意 p=0.004						
中位	勉強以外に様々な体験をさせた	高群 (%)	74.5	25.5	100.0	(611)
		低群 (%)	59.1	40.9	100.0	(225)
		合計 (%)	70.3	29.7	100.0	(836)
	0.1%水準で有意 p=0.000					
	きちんとしつけをした	高群 (%)	76.8	23.2	100.0	(384)
		低群 (%)	64.6	35.4	100.0	(452)
合計 (%)		70.2	29.8	100.0	(836)	
0.1%水準で有意 p=0.000						
下位	勉強以外に様々な体験をさせた	高群 (%)	66.9	33.1	100.0	(354)
		低群 (%)	48.4	51.6	100.0	(157)
		合計 (%)	61.3	38.7	100.0	(511)
	0.1%水準で有意 p=0.000					
	きちんとしつけをした	高群 (%)	67.4	32.6	100.0	(227)
		低群 (%)	55.9	44.1	100.0	(286)
合計 (%)		61.0	39.0	100.0	(513)	
1%水準で有意 p=0.008						

の上位層と中位層はそれぞれ5%水準で有意であるのに対し、下位層のほうは0.1%水準で強い有意差が確認されたこと。実際「子育てに成功している群」の数値をみると、下位層の読み聞かせ「高群」は7割で、上位層と中位層の「高群」とほぼ同じ割合である。一方、読み聞かせ「低群」については、上位層と中位層は6割であるが、下位層は5割にとどまっている。文化階層上位層と中位層に比べ、下位層での読み聞かせ「高群」と「低群」との間に、大きな差がある。

「美術館や博物館に行く」については、「本の読み聞かせをする」と同様に、どの階層においても「高群」が「低群」に比べ、「子育てに成功している群」の比率が高い。ただし、

「高群」と「低群」との間の有意差は、上位層では1%水準、中位層では5%水準であるのに対し、下位層では有意差がみられなかった。つまり上位層から下位層に行くほど、行為を行う頻度の違いによる子育て成功感の違いが小さくなる傾向がある。

次に中学校入学前の子どもの教育やしつけ方針の違いが母親の子育て成功感にどのような影響を与えるのか、文化階層別でみてみよう(表3)。

過去の教育やしつけ方針として、「勉強以外に様々な体験をさせた」と、食事、早寝早起き、あいさつに関する項目から作った「きちんとしつけをした」という変数を取り上げる。両方とも「高群」は「低群」に比べ、「子

表4 子育て成功感×現在の子どもへの接し方×文化階層

HQ21B×HQ16×Q31						
文化階層	現在の子どもへの接し方		子育てに成功している群	子育てに成功していない群	合計	N
上位	子どもに小言を言う	高群 (%)	66.7	33.3	100.0	(637)
		低群 (%)	75.4	24.6	100.0	(134)
		合計 (%)	68.2	31.8	100.0	(771)
	10%水準で有意 p=0.053					
	子どもとスポーツを楽しむ	高群 (%)	72.6	27.4	100.0	(541)
		低群 (%)	57.3	42.7	100.0	(227)
合計 (%)		68.1	31.9	100.0	(768)	
0.1%水準で有意 p=0.000						
中位	子どもに小言を言う	高群 (%)	67.8	32.2	100.0	(667)
		低群 (%)	79.8	20.2	100.0	(173)
		合計 (%)	70.2	29.8	100.0	(840)
	1%水準で有意 p=0.002					
	子どもとスポーツを楽しむ	高群 (%)	76.5	23.5	100.0	(596)
		低群 (%)	54.7	45.3	100.0	(243)
合計 (%)		70.2	29.8	100.0	(839)	
0.1%水準で有意 p=0.000						
下位	子どもに小言を言う	高群 (%)	58.6	41.4	100.0	(408)
		低群 (%)	70.8	29.2	100.0	(106)
		合計 (%)	61.1	38.9	100.0	(514)
	5%水準で有意 p=0.025					
	子どもとスポーツを楽しむ	高群 (%)	66.5	33.5	100.0	(346)
		低群 (%)	49.7	50.3	100.0	(167)
合計 (%)		61.0	39.0	100.0	(513)	
0.1%水準で有意 p=0.000						

育てに成功している群」の数値が高く、有意差がみられた。もう少し詳しくみると、「勉強以外に様々な体験をさせた」について、「高群」での「子育てに成功している群」の比率をみると、中位層は最も高く74.5%で、上位層は71.0%であるが、下位層は66.9%で、相対的に低い。とはいっても、上位層は1%水準で有意に対して、中位層と下位層とも0.1%水準で強い有意差があった。つまりは中位層と下位層は上位層に比べ、子どもに勉強以外に様々な体験をどれくらいさせたかは、母親の子育て成功感に与える影響が最も強いといえる。

「きちんとしつけをした」では、上位層と下位層は1%水準の有意差であるが、中位層は

0.1%水準で有意を示している。どの階層も子どもにきちんと食事をさせたり、早寝早起きという生活習慣を身につけさせたり、きちんとあいさつをさせたりしたかどうかによって、母親の子育て成功感の度合いが変わってくるが、中位層は最もその傾向が強いことが示された結果である。

過去の子育てのあり方をみてきたが、ここで現在、母親の子どもへの接し方が子育てで成功感に与える影響について、「子どもに小言を言う」「子どもとスポーツを楽しむ」を取り上げ、文化階層別の特徴をまとめてみる(表4)。

「子どもに小言を言う」では、中位層は行う頻度による母親の子育て成功感への影響が

表5 子育て成功感×親子の会話の量×文化階層

HQ21B×Q44×Q31					
文化階層	親子の会話の量	子育てに成功している群	子育てに成功していない群	合計	N
上位	高群 (%)	75.5	24.5	100.0	(351)
	低群 (%)	62.7	37.3	100.0	(405)
	合計 (%)	68.7	31.3	100.0	(756)
0.1%水準で有意 p=0.000					
中位	高群 (%)	76.6	23.4	100.0	(380)
	低群 (%)	64.9	35.1	100.0	(442)
	合計 (%)	70.3	29.7	100.0	(822)
0.1%水準で有意 p=0.000					
下位	高群 (%)	69.5	30.5	100.0	(197)
	低群 (%)	55.8	44.2	100.0	(310)
	合計 (%)	61.1	38.9	100.0	(507)
1%水準で有意 p=0.002					

最も大きい（有意差は上位層：10%水準、中位層：1%水準、下位層：5%水準）。また、どの階層も「低群」は「高群」より「子育てに成功している群」の割合が高く、子どもに小言を言わないほうが母親の子育て成功感が強いことがわかる。一方、「子どもとスポーツを楽しむ」はどの階層も0.1%水準で強い有意差を示している。「子どもとスポーツを楽しむ」は、行う頻度が子育て成功感に与える影響が最も高い。これはどの階層にも共通している。また、ここでは紙面の関係で表に示さなかったが、「子どもをほめる」も、どの階層においても行う頻度が高いほど母親の子育て成功感が高くなる傾向である。

表5は親子の会話の量と母親の子育て成功感との関係を文化階層別でみた結果を示している。上位層と中位層では0.1%水準、下位層では1%水準の有意差が認められた。どの階層も親子の会話の量の「高群」のほうが「低群」より「子育てに成功している群」の割合が高く、両群の差は10ポイント以上開いている。

本項で、母親の過去の子育て行為やしつけや子どもの教育方針、今の子育て行為、また親子の会話の量の頻度が母親の子育て成功感に及ぼす影響は階層によらず、ほぼ同様な傾

向がみられた。ただしそれぞれの階層の中で、行う頻度による子育て成功感への影響の強さが異なる。

#### 4.4 仮説4の検証

前項で述べてきたように、子育てのあり方が母親の子育て成功感に与える影響は基本的に文化階層によらず、同様な傾向がみられた。では、母親の子育て成功感を規定する要因は何か、文化階層によって異なるのか、また文化階層によらず共通している部分があるのか、それぞれの階層ではどのような特徴があるのかを明らかにしたい。

表6は母親の子育て成功感の規定要因について、全体および文化階層別にロジスティック回帰分析を行った結果である。基本的には前述してきた母親の過去や現在の子育て行為、子どもからみた親子の会話の量といった項目のダミー変数を独立変数として投入した。さらに、母親の過去の教育方針として「子どもを尊重・応援した高群ダミー」、現在の子どもの接し方として「子どもをほめる高群ダミー」「子どもをほめる低群ダミー」、生徒票の「学校の勉強に積極的高群ダミー」、子育て分担について「子育てはほとんど母親が行っているダミー」、「子どもの学力」を独

表6 母親の子育て成功感の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	全体		文化階層：上位層		文化階層：中位層		文化階層：下位層	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
本の読み聞かせをする高群ダミー	0.114	1.120	0.004	1.004	-0.049	0.953	0.518	1.679*
美術館や博物館に行く高群ダミー	-0.013	0.987	0.034	1.034	0.109	1.116	-0.273	0.761
勉強以外に体験させた高群ダミー	0.279	1.322*	0.161	1.174	0.201	1.222	0.501	1.651*
子どもを尊重・応援した高群ダミー	0.294	1.342*	0.070	1.073	0.586	1.796*	0.221	1.247
きちんとしつけした高群ダミー	0.278	1.321**	0.235	1.265	0.364	1.439*	0.173	1.189
子どもに小言を言う高群ダミー	-0.511	0.600***	-0.350	0.705	-0.777	0.460**	-0.428	0.651
子どもをほめる高群ダミー	0.250	1.285+	0.290	1.336	0.271	1.311	0.248	1.282
子どもをほめる低群ダミー	-0.695	0.499***	-0.706	0.494*	-1.033	0.356**	-0.316	0.729
子どもとスポーツを楽しむ高群ダミー	0.450	1.568***	0.447	1.563*	0.531	1.701**	0.347	1.414
学校の勉強に積極的高群ダミー	0.368	1.444**	0.174	1.190	0.620	1.858**	0.257	1.294
親子の会話の量高群ダミー	0.443	1.557***	0.418	1.519*	0.408	1.504*	0.496	1.643*
子育てはほとんど母親が行っているダミー	-0.149	0.862	-0.197	0.821	0.007	1.007	-0.270	0.764
子どもの学力	0.110	1.117***	0.155	1.168***	0.133	1.142***	0.033	1.033
定数	-0.740	0.477	-0.697	0.498	-0.978	0.376	-0.510	0.601
決定係数	0.163		0.146		0.217		0.148	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000		p=0.000		p=0.000	
N	2012		725		796		488	

注：+：p<0.10、\*：p<0.05、\*\*：p<0.01、\*\*\*：p<0.001。

立変数として追加した。

まず各階層の特徴を記述したい。上位層では、母親の子育て成功感を規定する最も強い要因は「子どもの学力」で、0.1%水準の有意差である。「子どもとスポーツを楽しむ高群ダミー」「親子の会話の量高群ダミー」は5%水準で有意差が認められた。また、「子どもをほめる低群ダミー」は5%水準で負の有意な影響をもっている。

中位層では、上位層と同様な傾向がみられたほかに、「学校の勉強に積極的高群ダミー」「子どもを尊重・応援した高群ダミー」「きちんとしつけした高群ダミー」は正の有意に働き、「子どもに小言を言う高群ダミー」は負の有意に強く働いている。

下位層では、上位層と中位層と共通している規定要因は「親子の会話の量高群ダミー」で、それ以外に「本の読み聞かせをする高群ダミー」と「勉強以外に体験させた高群ダミ

ー」は5%水準の有意差がある。

ここで、規定要因の共通点と相違点をまとめてみる。どの階層にも共通しているのは、親子の会話の量が母親の子育て成功感を規定する要因となっていることである。子どもと会話を交わすことは母親の子育てでよく行われる行為である。親子の会話によって、日々子どもの成長が確認できると同時に、母親自身が子育ての充実感や満足感を得られるのではと考えられる。ただし、本調査では、親子の会話の量は把握できるが、会話の質まで把握できていない。階層によって、会話の質が異なってくる可能性があるかもしれない。また、母親の子育ての成功感はやはり家庭の中で誰が子育てを担っているのか、父親の子育てへのかかわりと関係しているため、本研究で唯一の質問である子育て分担について、主な子育て担い手として「ほとんど母親が行っている」「主に母親が行っているが父親もか



## 5 まとめと考察

なり関与している」「父親も母親も同じ程度行っている」「主に父親が行っているが母親もかなり関与している」「ほとんど父親が行っている」という5つの項目を「ほとんど母親が行っている」とそれ以外の2群に分けて、「子育てはほとんど母親が行っているダミー」を投入してみた。しかし、子育て成功感に有意な影響をもっていない結論だった。

また上位層と中位層に共通しているのは、子どもの学力が0.1%水準で正の有意な影響を与えている。しかし、興味深いのは下位層には有意差が確認できなかったことである。上位層と中位層に関しては、子どもに基本的な生活習慣をきちんと身につけさせるといったしつけをしたり、子どもがやりたいことを応援したり、子どもをほめたりするだけでは物足りないようである。中学生の母親は子どもの学業達成も自分自身の子育ての重要な役割であると考えているのであろう。

一方、下位層にとっては、子どもの学力が規定要因になっていないのは、下位層の母親は上位層や中位層ほど子どもの学力を重要視していない可能性がある。また意識の上で、重視しようと思っても、様々な制約で子どもの学業に力を入れることができないこともあり、最初からあきらめている可能性もある。今回の調査からその原因を追求することが難しい。親子の会話の量については、下位層は有意差が弱く、上位層と中位層に比べ、それほど強い規定要因にはなっていない。

下位層で本の読み聞かせが規定要因になっているのは実は少し意外だった。読み聞かせは子どもの小学校の国語、算数の成績に有意な影響を与えていると浜野（2009）が指摘している。したがって、子どもの学力への関心が高い上位層では、本の読み聞かせは母親の子育て成功感の規定要因として有意に影響を与えるのではと予測したが、結果は有意に出なかった。上位層は読み聞かせの比率がもともと高いため、母親の子育てに成功しているかどうかを分ける規定要因になりにくいのではと推測している。

ここでは、本稿で明らかになったことをまとめる。まず1つめは、文化階層によって、母親の子育てのあり方や子どもの学力、子どもからみた親子の会話の量が異なる。特に子どもの学力に影響を及ぼすといわれる本の読み聞かせや美術館見学といった過去の子育て行為や子どもの学力では、上位層のほうが高く、下位層との間に、明らかに違いがある。一方子どものしつけについては、特に本調査で取り上げた子どもの食事の世話、早寝早起き、あいさつといった基本的なしつけは子育てでよく行う行為でもあるため、上位層と下位層では、有意差がみられなかった。本研究からも社会階層が子育てのあり方を規定する要因である（本田 2008）という指摘を確認することができた。2つめは、客観的要素の強い子育てのあり方だけではなく、主観的な母親の子育て成功感においても上位層のほうが高く、文化階層による差が確認できたこと。3つめは、過去や現在の子育て行為の頻度が母親の子育て成功感に与える影響は文化階層にはよらず、同様な傾向がみられた（「美術館や博物館に行く」を除く）。4つめは、母親の子育て成功感を規定する要因については、どの階層にも共通しているのは親子の会話の量である。本の読み聞かせや子どもに勉強以外の様々な体験をさせたことは下位層のみ、子どもの学力は上位層と中位層のみ有意な影響をもつ。

文化階層による母親の子育て成功感の規定要因の違いから、以下の課題がみえてきた。まず、どの階層でも親子の会話の量は母親の子育て成功感に影響を与えているため、親子の接触時間や会話をより多く持つことは母親の子育て成功感を高める有効な手段であろう。

上位層は子どもと一緒になにかを楽しむことや子どもを認め、ほめること、親子のコミュニケーションを行うといったことに力を入れ、かつ子どもの学力にも力を入れることで、子育てに成功しているという気持ちを持って

る。どちらかというと全方位型な母親像である。逆にいえば、子育ての様々な面に力を入れるということはどちらかが思う通りにならないと、充実感や成功感が持ちにくくなる恐れがあるのではと考えられる。中位層も上位層に近い傾向で、さらにしつけや学校の勉強への積極的な取り組みも規定要因となっていることから、子育て成功感を高めるために、より広範囲にわたって、子育てに力を入れなれないといけないとも読み取れる。

一方、下位層では学力は規定要因にはなっていないが、学力に影響を与える本の読み聞かせが子育て成功感に有意な影響をもつことが確認された。また子どもに勉強以外に様々な体験をさせたことは下位層のみ、子育て成功感に対して有意な影響をもっている。下位層は学業以外の広い意味での子どもの教育に注意を払っているとうかがえる。とは言っても、子どもの学業達成が規定要因になっていないことから、階層差が歴然としていることがわかる。

#### <引用文献>

- 広田照幸、1999、『日本人のしつけは衰退したか』講談社。  
本田由紀、2008、『「家庭教育」の隘路——子育てに強迫される母親たち』勁草書房。  
Benesse教育研究開発センター、2007、『第3回子育て生活基本調査』。  
浜野隆、2009、『家庭での環境・生活と子どもの学力』Benesse教育研究開発センター 2009『教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書』（お茶の水女子大学・Benesse教育研究開発センター 共同研究）。  
荻谷剛彦、2001、『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂。

階層が高いほど子育て成功感が高くなるという結果や、母親の主観的な気持ちである子育て成功感を規定する要因をみると階層格差の固定化、再生産につながっていると言える。荻谷（2001）は学校での成功からおりてしまう社会階層の低い子どもたちは、あえておることで自己有能感を高めるようになっていると指摘している。子どもの教育においては、インセンティブ・ディバイドという問題が起こっている。今回の研究からは、下位層では、子どもの学力と子育て成功感と相関がないことがわかった。それは下位層の母親は子どもの学業達成にそれほど関心がないためなのか、それとも関心があっても、力を入れられない現実があるので、最初からあきらめているためなのか、本調査のデータからは確認できない。ここからは推論ではあるが、下位層の母親は子どもの学業での成功からおることで自己の子育て成功感を高めるようにしている可能性があるのではと考えている。